

泉のこと，教養学部のこと

元教養学部長 佐々木 俊 三

卒業生 A 「教養学部三十周年なので，先生，学部改組の頃の経緯を少し話していただけますか。」

先生 「そうですね。三十周年ですか。三十といえば，もう一人前ですね。おめでとうございます。五十年前のことですが，私の先生は，こう仰っていました。「昔は二十歳になれば覚悟の思いを致すことができたが，今はそれが三十になっている」，と。きっと教養学部も学部の名前に覚悟を致すことができる年齢になったということですね。」

卒業生 B 「そこは，私には解りません。教養を持つということは，種々な経験をしないとできないことだと思いますが，先生から見ても昔と今では，成熟の度合いが違うのでしょうか。私は教養学部を出たけれども，「教養」って難しいことで，まだよく解らないのです。」

先生 「多分そうでしょうね。学生だけではありません。先生だって，時代や環境のせいで，成熟の度合いは遅れているのです。ましてや学生の遅れは，仕方ないことですね。教養学部は，知の学際化，総合化を目指しました。しかしそれは理念で，現実にはなかなか難しかったです。先生たちには皆，専門があり，専門に拘りますから，知の学際化とか総合化とか言っても，なかなか難しいのですね。総合は学生に任せるといようなことになりかねない。でも，隣接領域のグルーピングで，先生方はそれぞれの研究領域で交流し，面白い効果を持つこともあったようです。カリキュラム上では「現代社会の諸問題」という科目があり，特殊な題目の講義を複数の先生方が担当され，相互に関心を共有され，発展されましたね。」

卒業生 A 「そうですね。私も受けた覚えがあります。理系の先生も文系の先生もありで，私たちがいずれかに固まるわけではなく，刺激されて関心の幅を広げた覚えがあります。」

先生 「理系と文系の境界を跨いだ問題提起をと思っても，現実にはなかなか難しいのです。でも生物学や物理学の先生が，文化人類学や社会学の先生たちと，「水とは何か？」などの問題で，話し合ったりもありました。サッカーのクラブ運営やサッカー文化論，サッカー技術論などを一緒に講義するなどと言ったこともあったような記憶があります。最近，認知症が進んでいるので，正確な記憶ではありませんが。」

卒業生 B 「ありました。そういう科目は，皆が取りたがる科目で，結構人気があったと

思います。あまり、大きな声ではいえませんが、そういう科目は単位が取りやすいという安易な選択の場合も、学生側にはあったように思います。」

先生 「そうですね。先生の方でも他の専門に踏み込んで何か言うのは、ちょっと気がひけるので、結果、採点が甘くなるという傾向はありました。」

卒業生 A 「最初の頃、教養学部という名前は、高校生にとっては人気でした。先生方は、「教養」という名前を学部冠して、売り出す時に、どのような努力をされましたか。」

先生 「先生の数が多く、受け入れる学生数が少なかったので、全員に卒論を書かせるという試みは、しましたし、うまくいく場合も行かない場合も、学生の立場から見れば、少なくとも大学に入って卒論を書いたという達成感とは与えられることができたように思います。でも、そのことが原因で、大学側からもっと学生数を増やし、学科創設をして学部改組をしてもらいたいという要望を受けてしまいました。東北地方の高校での「教養学部」の認知度は高く、そこに踏み込む余地はまだ十分あると睨んで、学部改組に踏み切ったのです。」

卒業生 A 「そうですね。地域構想学科が新しくできて、教養学部は4学科になりましたね。」

先生 「従来の3専攻を学科へ昇格し、地域構想学科を合わせて4学科、1学科学生定員100名ですから、400名となり、土樋の学部と定員では肩を並べられる程度になりました。継子同然だった学部が、ようやく大人になったということでしょうか。改組のことで、私たちは土樋の本部からいろいろな圧力を受けました。人数の増加がレベルの低下に繋がるのではないかと、そこが心配でした。でも、皆様の努力で、ここまで大きな学部にして頂いたことを、感謝したいと思います。」

卒業生 B 「泉キャンパスはキャンパスとしては綺麗なものなので、私は好きですし、今でも正門からのあの上り坂は思い出深いです。」

先生 「そうですね。設計で賞をとっただけあって、キャンパスとしては美しいと思います。以前は正門までしかバスはやってきませんでした。強い雨の日など学生はびしょ濡れになって教室に入ってきます。それでバスをキャンパス内まで入れることを画策しました。これは学生には喜ばれましたね。」

キャンパスからは泉ヶ岳が臨めます。江戸期は台の原を越えると原野で、七北田には刑場がありました。今の泉は昔の伊達藩の狩場であり、明治期は軍の演習が行われた場所です。どういう経緯か知りませんが、赤穂四十七士の唯一の生き残り寺坂吉右衛門がここに来て生涯を全うしていますよ。」

卒業生 B 「へえ、そんな場所があるのですか。知りませんでした。」

先生 「結構名所があるのですよ。山の寺洞雲寺なども明治から戦前にかけて名所でした。」

もちろん、私も生まれてはいませんが……」

卒業生 A 「先生は、昔の学生といまの学生を比べてどう評価されますか。」

先生 「大学教育は、一般教養と専門教育に分かれますが、教養学部は専門と一般教養と両者を扱う学部で、その点が他学部と違うところです。大学における一般教養の位置付けは、昔と今では随分変わってしまいました。猫も杓子も大学へ、という変化と、社会が資格重視になって、教養などをあまり謳わなくなったことは、大きいと思います。挙句に文科省がゆとり教育などと謳いました。教養を学び、学生が目を開くような驚きを学問から学ぶことも、少なくなったように思います。

第一、社会が変わって経済などの実学重視になり、またネットに頭の中を抜かれる傾向で、今とここという稀有な場所に生きているという実感を持つ学生は少なくなりました。それが大事なことだという意識が再び浮上したのは、東日本大地震に遭遇してです。ボランティアの意識も深まりましたね。何かしなくては、という意識がああ当時の学生にはありました。君もあの地震でボランティアを経験し、良い意味で目的意識を持った学生に変わりましたね。」

卒業生 A 「そうですね。私の卒論は贈与論でしたが、きっかけとなったのはボランティアです。先生とは何度も気仙沼に出かけましたね。」

先生 「そうでした。学問は研究も大事だけど、現場で生かされることのない学問は、はっきり言って無駄だと思います。どの学問にも現場はあるのです。その現場でこそ、教養は生かされるのだと思います。いまの学問は産官学の連携を大事にしますが、昔はそういう連携を意図的に絶ってきました。今は社会も大学も、産業や文科省から研究費をとってくる学者を優れた学者だと評価します。そういう側面もありますが、逆を言えば、大学が産業や文科省に丸め込まれている姿を曝け出してもいるわけです。

君が、ボランティアでたくさんの他大学の学生を世話した頃を見えています。そういう姿を見ている時、君が成長しているのを実感できて、先生には嬉しい時でした。」

卒業生 A 「大学という場所で、様々な学生の世話をすることが、自分にとってはとても大事な意義になりました。だからこそ、大学にとどまってもっと学生の世話をしたいと考えるようになったのですね。私は、いい意味で変えて頂いたと思っています。」

先生 「良かったね。大学が何をする場所なのか、君はよく理解したね。でも先生が言ったように、大学は社会の変化の中でその役割を変えつつあります。ボランティアに熱心だったのに、地域支援の予算をカットして、国際化路線に走っていった大学も見えています。以前はなかったのに、大学に孔子学院を置くような大学も増えていますね。外国語も中国語や韓国語を取る学生が一時増えました。大学は社会の変化に結構晒されているのです。そういう

変化の中で、若い人たちの成長をもっと巨視的な視野で見つめるような制度研究をしてくれると、嬉しいですね。」

卒業生 A 「はい、頑張ります。どうやればいいか、まだ皆目掴めませんが……」

先生 「先生方と一緒にあって、研究会を作ることです。国際情勢はかなり変化していますし、安全保障の問題や憲法との関連、将来のエネルギー確保の問題、若者がもっと生きやすく生活設計を立てやすいような社会の実現、生きてきた場所とこれから生きる場所の確保、風土や生活伝統を守り維持していくための方策、懸案の問題は山積ですね。大学が政府や社会に迎合するようなあり方ではなく、今大事な問題とは何かを整理し議論を深めるような場所に大学がなることを願っています。」

卒業生 B 「先生もまだ隠遁しないで、ご意見を聞かせて貰えると嬉しいです。」

先生 「いえ、もう認知症ですから駄目です。いまに、君が誰だったか、分からなくなって、君にあってもにこりともしなくなりますから。君たちの活躍を、認知症の影から祈っています、なーんちゃって……。」

卒業生 A 「相変わらずですね、先生。でも飲み会にはお誘いしますよ。先生の言われたことをよく噛み締めて、少しでも学生や大学が良くなるように精進します。」

先生 「有難う。楽しみですね。どうぞ頑張ってください。」

先生は帰られ、その後ろ姿を卒業生は見送りました。

卒業生 A 「先生の後頭部、また少し薄くなってんじゃない、どう思う？」

卒業生 B 「前からあんなんだよ。変わらないよ。結構元気だよ。でもさあ、先生、俺の名前覚えていないよ。お前の名前は語ったけれど、俺の名前は絶対言わなかった。ちょっとやっぱり来ていることは来ているな。だから、先生の背広、お古になったらくれるって言ってたけど、きっと覚えていないな。」

卒業生 A 「まあ、それは仕方ないね。時々お会いして、思い出させなきゃね。」

卒業生 B 「いやあ、駄目だな、多分。俺たちだって自分のことで忙しいし、お前だってそうだろう。」

卒業生 A 「まあ、そう言うことだ。時代は変わる……、人間も変わる……」

卒業生 B 「お前、人間変わるってのは、ちょっとまずいぞ。少なくとも俺にとって、先生は先生だからな。」

卒業生 A 「同一律だな。」

卒業生 B 「……？ 何？ お前、先生は先生だっていうこと？」

卒業生 A 「いや、来ていることは来ているな、っていうこと。」

卒業生 B 「……な～るほど。」



経歴

東北学院大学名誉教授。1947年，東京都生まれ。東北大学大学院文学研究科博士課程満期退学。東北学院大学教養学部長，学長室長，災害ボランティアステーション初代所長，副学長を経歴。専攻は哲学。著書に『遠来の跫音』（荒蝦夷）など。